

Trial & Error

トリアル・アンド・エラー

No.83

試 行 錯 誤



特集 タイ・カンブチア国境で問われているもの

タイ・カンブチア国境で問われているもの	2
カンボジア難民と国境の避難民	5
JVC活動の歩み — インドシナ難民の救援を中心にして	8
近づくカオイダン・キャンプの閉鎖と移動	12
一ノ瀬泰造を知っていますか	13
インドシナ難民問題の現在	14
My Dear Friend もらうお金に貴賤なし	16
JVCチャリティーカレンダー アジアから／ — 朝霞 ^{もや} の中で	18
JVCがすすめる100冊の本(3)	19
ボランティア登場6	20

タイ・カンブチア国境で問われているもの

行き詰まっていたカンブチア問題は、ベトナム軍司令部のカンブチアからの撤退に続き、内戦の当事者4者を揃えたジャカルタ会議の開催など少しずつ進展した。それに伴い新聞をはじめとするマスコミも、再びこの問題を取り上げるようになったが、その多くはタイ側からの取材によるせいか、民主カンブチア連合政府に偏ったものになっており、国境で起こっている問題を中立に取材したものは少ない。

そこで今回のT/Eでは、8年間タイ・カンブチア国境で難民救援を行ってきたJVCの活動を振り返りながら、いま何が問われているのか考えてみた。

JVCによる難民救援

JVCが設立されたのは1980年2月である。カンブチアやラオスから逃れてくる難民のために何かしたいが、何をどうしたらいいのかわからないボランティアたちの受け皿として発足した。難民という言葉をその時に知った人も多い。その後活動地は、アフリカのソマリアやエチオピアに広がったが、カンブチアの難民問題への取り組みは、JVCの活動の原点として現在も継続して行われている。

当時、やっとたどりついたタイの救援センターで衰弱したまま息を引きとっていった人々の群れを覚えていることと思う。水を、食糧を、薬をと、国連や各国のNGOが奔走していた。JVCが国境地帯に到着したのは、そのような緊急事態から少し脱した時期であった。続々と各国からの救急物資が届けられ、JVCも日本から送られた古着や薬品を国境に運んだ。ほとんどの人が自分たちのやっていることに疑いなど持っていなかった。当時国境で活動していた田島誠さんはつぎのように記している。

「……国境上から難民が姿を消すためには、まず

カンボジア国内の政治的・経済的安定が第一義の不可欠な要素であり、難民を無くすために援助を減少させたり、打切ったりすれば良いというのは短絡的かつ暴力的な論理展開である」また、「国境側からの人道的見地に立った国際救援活動はこういった政治の場面に於いても、政治的に全く力がなく弱い人々の声を尊重し、“政治のエゴイズム”に対する緩衝剤としての役割を果たしている」

タイ政府や国際社会の思惑によって、25万人もの人々が国境に滞留させられていたことは知っていたが、私たちの関心は彼らの健康であり、環境の改善であった。援助は政治を越えており、政治的、経済的（カンブチア国内復興）解決をみるまで、国境の難民村の人々の援助を続けようと決意していた。自発的帰国を促すために援助を停止するなど考えられなかった。

しかし、国境の活動を続ける一方で、難民流出国カンブチアの復興にも目が向けられていた。国境に滞留する人々は本誌で栗野氏も述べているように国連で認めた難民ではない。内戦を続ける一方の政権に支配されている人々なのである。彼らはタイや中国が敵対するベトナムと戦っているため、それらの国々から支援を受けている。「彼らにのみ援助を続けることは、私たちも政治的かけひきの手伝いをしていることになってしまうのではないか」。国内での活動を行うことでバランスを取ると同時に、医療も食糧も不足している国内から難民として人々を出さないようにするなど、より本質的解決を目指そうとした。

1982年、井戸掘り技術者をカンブチア国内で働くNGOに派遣し、4年後には本格的活動が開始した。JVCのカンブチア難民への活動は1986年以来、タイ・カンブチア国境を挟んで両側から行われるように

なり、援助の矛盾がしだいに見えるようになった。

人道援助の限界

エバ・ミシリビエッチは『NGOが見たカンブチア』のなかで、国連の援助があまりにも国境の避難民の側に偏っていることを指摘している。彼女は「国際援助によって国境地帯の避難民を民主カンブチアの軍の統制下におくことは、次のことを確実にさせた。すなわち、カンブチア人民の「正統な」代表として国連に議席を与えられている民主カンブチア連合政府が、ベトナムおよびカンブチア人民共和国軍と戦うための人口基盤と兵力源をそこにえることである」と、今の援助のやり方が国境紛争を長引かせ、避難民を閉じ込めたままにしているという。

援助によって多くの人々の命が助かったが、同時にゲリラ勢力の回復にも力を貸すこととなった。もちろんその中には、虐殺を行ったボル・ポト派の兵士も含まれていた。ASEANなどの強引な後押しでできた三派連合政府は、イデオロギーの全く異なった政権の寄り合い所帯のためこぜりあいが続き、特に他の二派はボル・ポト派を恐れていた。これまで西側諸国は援助物資を送りこむだけで、難民問題の根本的解決に向けて動きだす気配はなかった。国境で働く国連職員やNGOはその矛盾に気が付いていたが、どうすることもできなかった。援助が政治に使われていると知りつつもやめることができなかったのである。政治を越えて行われるはずの人道援助は、政治のわくのなかで踏みとどまっていた。

難民問題の解決方法は3つしかない。①自国に帰ること、②流入国（庇護国）に定住すること、③第三国に定住すること、である。国境の状態がまだ流動的だった頃、体力を回復した人々の多くはカンブチアに帰っていった。しかしそれぞれの政治グループが明確になり援助体制が整うと、①は不可能になった。UNHCRを通じて帰国したのは、80年以降たった一人しかいない。その理由は「この問題は高度に政治的なものだ。タイにとってそれはヘン・サムリン政府に対する一種の暗黙の承認となり、タイの政策の失敗を表わし、他方プノンペンにとっては大きな宣伝上の勝利と見られるであろう」（『NGOが

見たカンブチア』）と、いうものであった。

②についてはタイ政府は当初から拒否している。そして結局③しか残らなかった。アメリカ、フランスをはじめとする西側諸国は、87年までに20万人以上のカンブチア難民を受け入れた。カオイダン・キャンプの閉鎖、移動が確定した今年は、最後の面接調査が行われている。ただしここで注意しなければならないのは、③に該当するのはUNHCR保護下にあるカオイダンの難民だけで、国境の避難民は入らない。タイ政府は避難民を難民と認めなかったので、多くの人が闇に紛れ国境のキャンプからカオイダンに侵入した。はじめ彼らはイリーガル（不法入国者）として扱われたが、時間が経つとともに食糧配給などは受けられるようになった。現在カオイダンには、KD、FC、RCのカードを持った人と何も持たないイリーガルがいる。’86年まで第三国に行くための面接を受けることができたのはKDカードを持った人だけだった。彼らの違いはただキャンプに入ってきた時期が早いか遅いかだけである。一向に侵入者は減る気配がないため、三派連合政府の基盤が崩れることと、引き取り手のない難民を抱え込むことを恐れたタイ政府は、カオイダン・キャンプの閉鎖に踏み切った。

もうすぐ第三国定住の道も閉ざされようとしており、難民にとっても避難民にとっても自主帰還のためのカンブチア問題の政治的解決を持つしかなくなった。

いくつかの改善点と残された問題

国境には現在三派連合政府がそれぞれ支配する8つのキャンプがあるが、そこにいる避難民の人権保護は常々問題にされてきた。1984～85年のベトナムの乾期攻勢を受けるまで国境に点在していた難民村では、ゲリラと民間人を分けられなかったので多くの子供たちまでが攻撃の犠牲者になった。難民村がベトナム軍の手に落ち、避難民はタイ領内に逃げ込んだ。その時軍の前線基地と避難民キャンプは分離されたが、完全に分けることはできなかった。ベトナムの再三の警告にもかかわらず、タイ政府やキャンプの責任者たちは民間人をタイ内部に移動させよ

日本政府によるインドシナ難民援助(62年度)

援助先	援 助 内 容	援 助 額		備 考	対 象
		億円	万ドル		
UNHCR	インドシナ難民援助一般計画	41.30	(2534)		タイ領内ホールディング・センター収容「カオイダン」難民
	カンボジア難民援助計画	4.00	(245)		
	海賊抑止計画	1.00	(61)		
	合法出国	0.50	(31)		
	ラオス難民自主帰還計画	0.30	(18)		
	ラオス難民認定作業計画	0.20	(12)		
小 計		47.30	(2901)		
UNBRO	カンボジア避難民救済計画	6.70	(411)		カンボジア避難民, タイ被災民
WFP	カンボジア難民救済計画	16.00	(982)	タイ米	カンボジア避難民, タイ被災民 カンボジア被災民
		6.50	(399)	魚缶詰	
		4.00	(245)	ビルマ米	
小 計		26.50	(1626)		
ICRC	カンボジア難民救済計画	2.50	(153)		カンボジア難民, 被災民
ICM	在タイ難民移送計画	2.05	(126)	米国向け移送費	
合 計		85.05	(5217)		

(注) 1ドル=163円で換算。

(外務省資料より)



うとはしない。彼らはベトナムの攻撃の緩衝地帯となっているのである。

しかし、キャンプ内ではいくつかの改善点も見られるようになった。8月末、サイト2を訪れた蓮尾慶治さんは以下の3点を挙げている。まず悪名高かったタスクフォース80というタイ人レインジャーが解散し、DPPU(Displaced Persons Protection Unit)が避難民の保護にあたるようになった。正規軍ではないタスクフォース80は訓練もろくに受けておらず、避難民たちはしばしば彼らの犠牲者になった。DPPUの方は教育も訓練も受けた人たちが構成されており、暴力事件は無くなった。さらにこれまで人権保護を任務にしてこなかったUNBROに、保護担当が置かれるようになった。

次の改善点は、女子のみに行われていた食糧配給が男子にも配られるようになったことである。各家庭の男女比により食糧の量が異なっていた。女の子の多い家庭は食糧が余り、反対に男の子ばかりの家庭では不足した。男子に配らなかった理由は、彼らを兵士の予備軍と見たからで、建前として軍事援助は行わないというUNBROの方針に反したからと思われる。男の子が女の子として育てられたり、さまざまな弊害を前にして修正せざるをえなくなったのだ。

3点目はマーケットが公認され、ブラックマーケットが無くなったことである。商売をするためにレインジャーにゆすられたり銃で撃たれることがなくなった。

これらのことは避難民の生活向上という点からは意味のあることといえるが、難民キャンプの固定化

がさらに進んだことを示している。サイト2には今も17万人もの人が収容され、プライバシーも自由もなく暮らしている。できることはその日その日を無事に永らえることのみである。最近、こどものけんかから親同士が殺しあうことがあった。人々のストレスは限界にきている。

日本はどんな援助をしてきたのか

最後に日本の援助にも触れておかなければならないだろう。日本はアメリカとならび、国境における援助の大拠出国だからである。援助担当者は日本の援助を国際的おつきあいのためというが、もちろんこの「国際」とは限られた範囲でしかない。

先に述べたように、国境の援助は民主カンブチア連合政府を支える形で続けられてきた。大量殺人をした波尔・ポト派の兵士の援助が黙認されたのは、カンブチアの人々の人権よりも政治が優先されたからである。最も援助が必要だったカンブチア国内は無視され、日本も同調した。今年のODA予算はアメリカをしのぎ、日本は一躍援助大国となってしまったが、どうやって使っているのかわからないというのが実状ではないだろうか。国民は政府に援助をお任せし、日本政府は国連機関にお任せしている。私たち日本のNGOの非力さも一因かと思うが、もっと一人一人が税金の使われ先としての援助に関心を持っていかねければと思う。国境へ日本からの視察は行われたことがなく、波尔・ポト派への援助に日本政府は寛大だった。援助に対する無関心が続けば本当に援助を必要としている人々には届かない。それは開発援助も難民援助も同じである。

カンボジア難民と国境の避難民

国境に滞留する人々はなぜ“難民”ではないのか

日本平和学会理事 栗野 鳳

「カンボジア難民」はなぜ生まれたか

「カンボジアは悲劇の国である。ベトナム戦争では米軍の介入を受け、波尔・ポト政権になってからは恐怖政治と農村への強制移住による飢えと病気によって、何百万という人々が死んだ。そして78年末にはベトナム軍が電撃的に侵入、波尔・ポト政権はタイ・カンボジア国境に追われた。そして数十万のカンボジア難民がタイへ歩いて逃げた。その途中でも多くの人々が傷つき、倒れた。ベトナム軍駐留下のカンボジアでも、ゲリラとの戦闘が続いた。ヘン・サムリン政権による国造りも進まず、豊かな国土は荒廃している。クメールの微笑といわれ、はほ笑みを絶やさなかったカンボジアの人々にとって、なんとも過酷な歴史である。

これは本年7月7日付「朝日新聞」の社説「カンボジア和平への期待」からの引用です。この社説の要旨は、その題の通り、カンボジア和平実現のため、「カンボジアの命運はカンボジア人自身が決めるべきもの」という基本原則をふまえつつ、関係諸国が如何に対応すべきかを論じているものです。この私の小論の冒頭で前記の部分だけを引用した目的は、カンボジア和平に直接関係する議論とは別に、カンボジア難民とタイ・カンボジア国境地帯に現在も滞留しているカンボジア避難民の問題を検討する上で、この部分が手掛りになると思うからです。特に問題としたいのは、「78年末には……数十万のカンボジア難民が……倒れた」という箇所です。

実を言うと、前記社説の記述は、まだマシな方で、他の多くの新聞記事や解説などでは、「ベトナム軍が侵入したため多くのカンボジア難民が流出した」といった単純な(短絡的な)、誤解を招く表現が平気で使われてきました。国際関係の学者や、政府当局者の中にも、この点、簡単に言っている人々が少なくありません。ベトナム軍に追われて国境地帯に逃げ、一時、難民として扱われ、その後、国境の避難民を支配するようになり、ゲリラ活動を続けてきたのは波尔・ポト政権残党やそれに追随する「クメール・ルージュ(赤色クメール)」武装分子なのです。

UNHCR(国連の難民救援機関)によって難民として扱われ、現在タイ国内のカオイダン・キャンプに残留しているカンボジア人、あるいは、これまでにアメリカその他に定住のため移送されたカンボジア人、また自発的に本国に戻って行った人びとの大部分は、必ずしもベトナム軍に追われて流出してきたのではないのです。前記社説の言葉を借りれば、「波尔・ポト政権になってからは恐怖政治と農村への強制移住による飢えと病気によって、何百万という人々が死んだ」のと同じ運命に陥ろうとしていた絶望的な状態から、「ベトナム軍が電撃的に侵入、波尔・ポト政権はタイ・カンボジア国境に追われた」ことによって、行動の自由を得、飢えなどを免れるため、あるいは戦闘の危険を避けるため、国境の方へ歩いてきたカンボジア人たちです。そして、1979年11月、タイ政府とUNHCRの間の協定によって、UNHCRが保護と援助を与えることになったのです。

タイのクリアンサック首相は、カンボジア難民に対するこの扱いを「オープン・ドア」政策と呼びました。1979年夏から秋にかけて、タイに流入しようとしたカンボジア難民を軍隊の力で強制的に追い返し、そのため何万ものカンボジア人が死んで、国際的にも非難されていた無慈悲な態度を改めたものでした。流入しようとする難民を強制的に追いかえすことをしないというのが、難民に対する扱いの最も基本的な原則の一つで、non-refoulement＝ノン・ルフールマンの原則と呼ばれています。

三派連合政府の成立

ところが、1980年春頃から、流入するカンボジア人に対するタイ当局の扱い方が再び変わりました。「オープン・ドア」政策を止めたとか変更したとは言いませんでしたが、実際上はそれに等しいことになりました。タイ当局は、カンボジア人を国境地帯のカンボジア領と見なされるところに集団的に居住させ始めました。また、他のカンボジア難民と同様に、UNHCRの援助を受けタイ国内のキャンプに居住していた「クメール・ルージュ(波尔・ポト派)」の人

たちは、その頃までにひそかにキャンプを脱出して国境地帯へ移動しました。

ハノイなどからは、タイ当局と UNHCR が「クメール・ルージュ」戦闘員の回復や再編成を援助しているという非難の声が聞こえるようになりました。そこで UNHCR はタイ国内のキャンプにいるカンボジア難民について自発的帰国の措置を実施し、「クメール・ルージュ」支配下の人たちでも強制的に国境地帯に移されることがないように、また、他のカンボジア難民で帰国を望む人びとは国境を越えて帰国しよう取りはからいました。この作業が進められていた 1980 年 6 月 23 日、タイ・カンボジア国境地帯でベトナム軍による攻撃が発生し、カンボジア難民 10 数名が死傷しました。「クメール・ルージュ」の人たちでなく、ハノイの非難の対象になるはずもない普通の人びとが犠牲になってしまいました。自発的帰国措置も中止されました。

タイや中国は、「クメール・ルージュ（ポル・ポト派）」に加えて、かつてカンボジアの国王・首相・国家主席の地位を占めたことがあるシハヌーク（殿下）のグループと、ソン・サン元首相のグループの人びとが、国境地帯に集ってきて「キャンプ」を形成するようにしむけ、この 3 つのグループが武装分子（戦闘員）を育ててカンボジア国内でヘン・サムリン政権の軍のみならず駐留ベトナム軍に対してもゲリラ攻撃を実施するよう種々の援助を与えました。さらに、身内の人びとが「ポル・ポト政権」の恐怖政治の犠牲になったこともあって、嫌がるシハヌークとソン・サンを無理に説得して、「民主カンブチア連合政府」を形成させました。いわゆる「三派連合」ですが、いずれにしても一種の亡命政権にすぎません。しかし、1980 年以来今日まで、国連総会などでは、この「政府」にカンボジアを代表する権利を認めてきています。そして、この「三派」それぞれの支配下に、現在約 25 万人といわれるカンボジア避難民が、行動の自由も、平和に生存する権利も奪われたまま滞留し続けているのです。

難民と避難民の違い

もともと、難民という言葉には、広い意味と狭い意味とがあります。「難民の地位に関する条約」

（1951 年）および「難民の地位に関する議定書」（1967 年）による「難民の定義」にあてはまる人びと（「定義難民」とも呼ぶ）の場合が最も狭義の難民で、日本語の「亡命者」がそれにピッタリでしょう。

しかし、インドシナ難民のように大量に流出してきた難民については、個人個人の審査を行って「難民の地位」を認定するようなことは不可能ですから、グループ（カテゴリー）として、「定義難民」に等しい地位を認め、それに適した扱いをすることが多いのです。国連総会などの決議で、その点を決定すれば、UNHCR としても、難民に対する保護と援助の措置をこの人びとに及ぼすことが可能です。1979 年 11 月から 80 年春頃までにタイ国内の UNHCR 管理下のキャンプに収容されたカンボジアの人びとは、この意味の難民です。現在、カオイダン・キャンプなどに 1 万 5000 人残っていますが、後述の避難民とは異った扱いを受けていますし、今後も、避難民と混同されるような扱いはなされるべきではありません。

しかし、前記の人々の他に、英語で *displaced person(s)*（流民、避難民）と呼ばれる人びとがあり、それらを含めて広義の難民という言葉が使われることが少なくありません。タイ・カンボジア国境地帯に滞留するカンボジア人たちは、*displaced person(s)* であり、避難民と呼ぶのが適当でしょう。

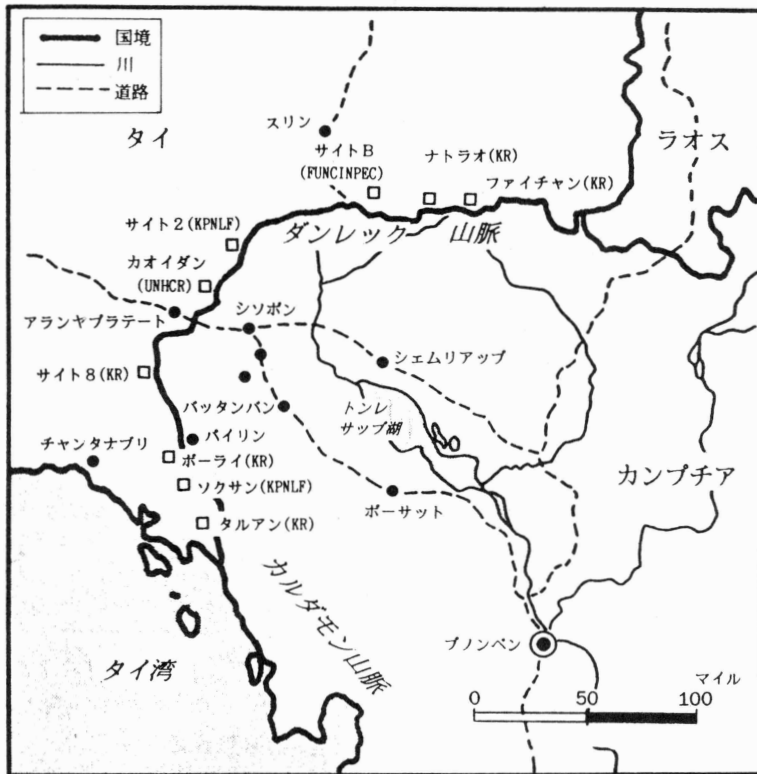
「定義難民」や、それらと同様に扱われる前記のカンボジア（ないしインドシナ）難民との大きな違いは、国境を越えて別の国の領域に入ってしまうことがなくとも、つまり自国領内にとどまっている場合でも、救援の対象として見られる可能性があり、現に、タイ・カンボジア国境地帯ではカンボジア領内にいたカンボジア避難民に対し、ユニセフや WFP（世界食糧計画）などの国連関係機関が援助を与えてきました。しかし、UNHCR は援助を与えてきませんでした。それは、前記の狭義の難民などの場合と相当大きく違って、国連総会などが UNHCR がこれらカンボジア人たちを難民として扱うことを決めなかったからです。タイや ASEAN 諸国も、国連総会にそのような要請を出しませんでした。ただ、国連事務総長の特別代表が任命され、またその指揮下に UNBRO（国連国境地帯救援計画）が実施され、これらカンボジア避難民も若干の救援の対象にはなって

きました。

しかし、これらカンボジア避難民の状態は、人道的見地から言って、一日も放置しておくことは出来ません。まず何よりも、この人たちが、この地帯に滞留していなければならない理由がありません。「定義難民」にも、それに準ずる難民にもなることができず、したがって与えられる援助も全く貧弱で、しかも危険な生活を強いられています。各派の武装分子を養い続けるための、国際的援助の「受け皿」として利用されているに過ぎない存在です。また、国際政治の将棋の駒、それも歩に過ぎないのです。

このカンボジア避難民たちを生み出したものは、「ベトナム軍の侵入」でもなければ「ヘン・サムリン政権による国造り」が「進まない」ことでもなく、「三派」それぞれのリーダーなどの思惑と、それを利用しようとしてきたタイや中国その他関係諸国の「国家理性」のなせるところであって、それらの責任はきわめて大きいと言うべきでしょう。「民主カンブチア連合政府」を「承認」し、大使や臨時代理大使を派遣してきた日本政府も、その責任の大きな部分を免かれうるものではありません。

タイ・カンブチア国境地帯地図

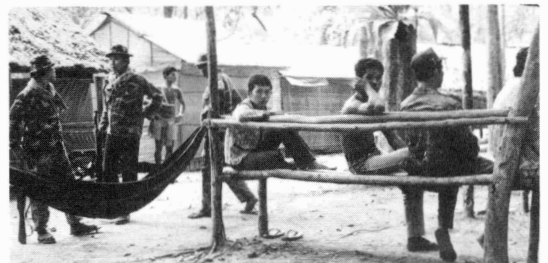


カンブチア避難民が滞留させられているキャンプ。次の組織の管轄下にある。

- KR — クメール・ルージュ (ポル・ポト派)
- FUNCINPEC — 独立、中立、平和、協力のためのカンボジア民族統一戦線 (シハヌーク派)
- KPNLF — クメール人民民族解放戦線 (ソン・サン派)
- UNHCR — 国連難民高等弁務官事務所

『NGOが見たカンブチア』より

	行政管轄機関	援助管轄機関	
難民	UNHCR	UNHCR	定義難民に準ずる
避難民	民主カンブチア連合政府	UNBRO	



ソクサン・キャンプ (1981年ごろ)

JVCの活動の歩み

インドシナ難民の救援を中心にして

●大歓迎されたJVC創立（1980年2月）

この小文を書くために、創立前後からのJVCの活動を報道した新聞のスクラップ帳を見た。きちんと整理された帳面からは、担当者の真面目な性格とJVC、あるいはインドシナの難民に寄せる愛情がひしひしと感じられた。まだ見ぬ人に、改めてお礼を言いたいと思う。今もJVCを見守られ続けて、この文を読んでいられることを信じて……。

そのスクラップを見ると、1980年2月のJVCの創立を『待ちに待ったもの』として報道しているものが多い。そのころの状況を振り返ってみよう。

ポル・ポトの圧政と虐殺に続くベトナム軍の進駐のため、タイ国境に殺到するカンブチアの難民たち。その対応をめぐる逡巡するタイ政府。その間に危機的様相を強める難民の状況……。それを見かねて各種の国連機関、欧米・オーストラリアの民間団体が難民の救援に駆け付ける。それに対して、一向に動かぬ、アジアの大国日本政府。焦るように個人の資格で飛び出した日本人ボランティアたち……。しかし、個人では活動にかぎりがあり、UNHCRも個人ボランティアの受け入れを中止することになった（1980年2月18日）。

日本の難民救援の立ち遅れが国際的な非難を集め、しかもわずかに駆け付けた個人ボランティアも締め出される……。まさにそのような『危機的な状況』でJVCは結成された。UNHCRの決定の10日後の1980年2月27日のことである。

●落穂拾いのプロジェクトから発展（1980年前半）

設立当時は、今述べたような理由のため、『ボランティアのボランティア』をする団体と呼ばれていたが、徐々に一つの意志と目的をもつ団体として活動を開始する。その最初が、同年4月から始まった次の五つのプロジェクトである。

- ①ウボン難民キャンプ（ラオス難民）に、自動車整備工の養成所を建設。
- ②ノンカイ難民キャンプ（同）で運動場、日本語学校の建設。

③三派連合政府の管理下にある避難民の集結する難民村に救援物資を配給。

④ランシットのトランジットキャンプでレクリエーション指導。

⑤バンコクのクロトイスラムの学校への援助。

これを見てお分かりとも思うが、正直なところ、もちろん必要な活動ではあるが、『難民救援の表舞台』ではない。ラオスからの難民は数も少なく、そう深刻な状況に置かれているわけではない。またレクリエーションの指導も緊急救援とは……。

このように、JVCは『遅れてきたNGO』として、いわば落穂拾いの始めた感もある。

しかし、与えられた現場で誠実に活動することでJVCは周囲の信頼を得ていく。6月にはタイにおける避難民救援協力委員会（CCSDPT）に加盟、7月には、日本人以外のボランティアも参加するようになった。当時、ボランティアを志して、バンコクを直接訪れた日本人以外の人間を受け入れる組織は『ボランティアのボランティア団体』JVC以外になかったため、これ以後多数の「外国人」を受け入れることになった。

また日本国内でもJVC東京連絡事務所が設立。長期的な救援活動の基礎が固められていく。

●地道な努力で信頼を勝ち得る（1981年後半）

初期の難民救援の経験が乏しい人たちの苦労は大変なものがあつたであろう。しかし、情熱と努力で任務を成し遂げていった。本当にご苦労様でした。JVCの基礎を作ったのは、取りあえず情熱だけをもって駆け付けたあなた方だ。最近あまり姿を見せない方もいらっしゃるが、お元気でしょね。

というわけで、わずかの期間に、JVCはタイ政府やUNHCRの信頼をかちえ、プロジェクトの数を増やしていった（ただ、この期間には、難民の危機的状況は峠を越し、欧米のNGOのなかには、撤退を開始するところもあったことに触れておくほうがフェアというものだろう）。

具体的には、7月には次のようなプロジェクトの

開始が決まった。

- ①ソククラ難民キャンプ（ベトナムからのボートピープル）の救援，井戸掘り。
- ②キャンプ周辺の農村での，衛生，農業等の指導。
- ③ブリラム県の小学校への援助。
- ④各地のキャンプでの手工芸品の購入と販売。

難民の救援というと，格好いいことを想像する人がおられるかもしれない。しかし，その大半は地道な仕事である。たとえば，上のソククラでの衛生指導とは，トイレの清掃，汲取の指導・監督や，焼却。もちろん，格好のいいことも多少はある。たとえば，クラ島に監禁されていた42人のボートピープルをUNHCRと救出という記録が残っている。その詳細は分からないが，胸のすく記録である。

1980年11月には，カオイダン・キャンプでの自動車エンジン，農業機械の修理学校の建設も始まっている。また同じ時期にバンコク在住の日本人主婦による古着寄贈などの活動の記録も見られる。

ちなみに，JVC創立約1年後，1981年2月13日付けの朝日新聞は，JVCの活動を大々的に報ずる記事を掲載，その中に活動状況の一覧表がある。活動現場は10カ所，6カ月以上活動しているボランティアとして，17人の名前をあげている。

●忘れられない尊い犠牲（1981年4月）

順調に拡大していったJVCの活動であるが，設立2年目の春に，忘れることができない事件に遭遇する。西崎憲司氏の遭難である。

1981年4月17日，アランヤプラテートの近郊で暴漢の凶弾によって，西崎氏が不幸な最期を遂げられた。後日逮捕された犯人の自供によると，救援の資金を狙った計画的な犯行であったとか……。

当時では，付近の難民村に食糧や医薬品を送るなどの活動をしていたが，西崎氏はその中心的活動家であった。

●難民救援に大奮闘（1981～82年）

西崎氏の死という不幸な事件はあったが，1981年もJVCは着実に活動を続けていった。まず，1月には東京連絡事務所が，JVC東京リエゾンオフィス

（のちに東京事務所と改称）に改組された。

この年には前年から進められていた，さまざまなプログラムが，実行または完成している。ウボンの織物学校，バナニコンの日本語学校，西崎憲司記念技術学校と名付けられたカオイダンの技術学校，それらが開校されたのが，この年である。さらに，バナニコンとクロントイの2カ所に図書館を開館，JVCの難民救援が一番活発に行われた時期といってい

いだろう。また，この時期は難民のタイ流入が一時期の4分の1に減り，JVCの活動がより一層，難民とタイ国民の生活状況の改善に目の行った時期でもある。

もちろん，前年から継続してきたものだけでなく新しい活動も開始している。チェンコン・キャンプでの伝統医療プロジェクト，難民村に対する，野菜の種の供給プロジェクト，教育プロジェクトが始まり，北の3キャンプ（チェンコン，ソプトアン，バンナムヤオ）の，職業訓練プログラムの改善の指導も，要請されている。

81年8月にはノンカイ地方で大洪水が起こり，その救援活動も試みている。

●縮小する活動と，広がる視野（1982年）

JVCの活動の目は，ますます生活状況の改善に目が向けられた。東北タイでの給水プロジェクト，タイ・カンブチア国境での移動診療（実際の診療は翌年1月から）などが，この年始まった。バンビナイ・キャンプでの自動車修理教習所も開始された。

開始されるものがある反面，設立以来のいくつかのプロジェクトが終わった。この年は難民のタイ流入が5万人を切り（79年は39万人），滞留数も一時期の半以下になった。その結果，年末には北3キャンプとウボンキャンプなどが閉鎖され，必然的にそこでの活動が終結。また，バナニコンでのレクリエーション活動も終わった。

このように，タイでの活動が一段落する一方，JVCの目は広い地域に向けられている。アジアではシンガポールのUNHCRのキャンプ，カンブチアのOXFAMの井戸掘りチームに人材を派遣。ソマリアのエチオピア難民，レバノンの被災民の調査も行っ

ている。日本国内の定住難民にむけて日本語家庭教師活動を始めたのもこの年のことだ。

●救援活動の継続とスラムへの展開（1983～84年）

第三国へ定住するものの数も減り、難民の状況が固定化しかかった時期である。JVCはこれまでの活動を継続すると同時に、クロントイ・スラムでの活動を強化していく。83年には、電気工養成所、研修所を開設しスラムの人々の求職活動の支援をしたり、強制的に移住させられた住民に、新しい住宅の建材を提供したりもした。

その一方、キャンプの維持のために、新しく開始されたものもある。84年のカオイダン・キャンプでの、給水、電気、防犯灯などの建設である。

●難民救援から復興支援へ（1985～87年）

難民キャンプ、避難民キャンプ（1984年のベトナムの乾期攻勢によりカンブチア領内にあった難民村は壊滅し、それ以降タイ政府の管理の下いくつかのキャンプに集合された）はますます固定化すると同

時に、情勢もすっかり落ち着いてきた。JVCは数少ない日本のNGOとして、最後まで活動を継続する決意と、戦争と混乱後のインドシナ半島の再建設を願う二つの気持ちで活動をすすめた。具体的に言えば、難民救援の継続、タイの社会の再開発、カンブチア・ラオスでの活動の開始の、三つである。

難民救援では、避難民キャンプでの補助給食、栄養保健教育、カオイダンでの西崎憲司記念技術学校、それにパナニコムでの日本定住予定者への、日本語教育、オリエンテーションである。

社会再開発では二つの特徴が見られる。一つは、スラムでの活動の中心が、子どもに向けられたことである。奨学金の給付、新図書館の建設などがそれにあたる。もうひとつは、都市から農村へ目がむいてきたことである。具体的には、タイ東北部（イサーンと呼ばれるタイでもっとも貧しい地域）で、農村の構造改善のプログラムが開始された（87年）。

カンブチアでは、総合的人道援助プログラムとして、孤児院の修復、OXFAMとの共同での井戸掘り、自動車修理のワークショップ及び技術学校、母子保

	1975	1979	1980	1981	1982
			2 4 6 7 8-11	1 4 8 10	1 3
JVCの活動		日本人ボランティアがタイにかけつける。	バンコクでJVCが設立される。 ランシット教育レクリエーション・プロジェクトの開始。 ウボン自動車修理教室所、日本語学校開校。 クロントイ・スラムで活動が始まる。 タイ・カンブチア国境の難民村で活動開始。 ソングラで活動が始まる。 パナニコム・ノンカイ、カオイダン、パナニコムのキャンプで活動が始まる。	JVC東京連絡事務所ができる。 ウボン織物学校、パナニコム図書館ができる。 パナニコム日本語学校、カオイダンの西崎憲司記念西崎憲司氏アラランヤプラテート郊外で遭難。 技術学校開校。 クロントイ図書館ができる。 国境の難民村に野菜の種、農具を配る。	始まる。 日本国内の定住難民のための日本語家庭教師活動がシンガポールのUNHCRに人材派遣（'85）。
難民をめぐる状況	海外に脱出する（4月）。 政権の掌握。旧政権側の人々がクメール・ルージュによる革命。 カンブチア人が、ベトナムとタボル・ポト政権下、十数万人の海外に脱出する（4月）。	イに逃げる（'79）。 ベトナムとヘン・サムリン軍がタイに流入する難民が激増。タイ政府は難民を追い返す（1月）。 ア国内に米を送る（12月'81）。 ランド・ブリッジによってカンブチセンターを開設する（10月）。 め、サケオ、カオイダンに収容タイ政府は難民の受け入れを認タイ政府は難民を追い返す（1月）。 タイに流入する難民が激増。タ ベトナムとヘン・サムリン軍が	パナニコム・キャンプ開設（9月）。 境沿いに難民村を形成（1月）。 の保護下に入り、他の人々は国すでにタイにいる難民はUNHCR	ノンカイ・キャンプ閉鎖（12月）。 ソングラ・キャンプ閉鎖（8月）。	当たる（1月）。 に代わり国境の難民村の救援に設立され、ユニセフ、WFP UNBRO（国連国境救援機関）

近づく

カオイダン・キャンプの閉鎖と移動

西崎憲司技術学校、広報担当 清水 俊 弘

カオイダン・キャンプいよいよ移動へ

1979年11月のキャンプ開設当時、赤土の色一色に染まっていたカオイダン難民キャンプも、今では、所々に見られる菜園や木々の成長により、緑のある、視覚的には以前よりもましな居住環境になってきている。これも公衆衛生の基盤を築きあげてきたNGOの努力の成果であろう。しかし、それと反比例するように、フェンスの中で人々の心は消沈していく一方である。長期にわたるキャンプ生活、減少する第三国定住の可能性、いよいよせまるキャンプ閉鎖と国境への移動、再び襲う戦争の影。昼間、我々救援団体のワーカーと接している時の彼らの明るい顔も、夜、明りもなく音もたてられない静かな暗闇の中で、彼らは何を考えているのだろうか。

弱い者が残される

1986年キャンプ閉鎖の発表があってから、それまで第三国定住のためのインタビューが受けられなかったFCケース(82年末以降にカオイダンに入った難民)が、またさらに1987年11月、RCケース(84年8月以降カオイダンに入った難民)が、同じく定住インタビューの権利を得た。アメリカを中心にオーストラリア、カナダなどが連日インタビューを行い、当時約2万5000人ほどいた難民も、現在では1万5000人ほどに減っている。ところで、このインタビューは、彼らの教育年数や家族環境、就職可能な職業技能の有無、また定住希望先におけるスポンサーの有無などが問われる。つまり定住後彼らがちゃんと生活していけるかが問題なわけだが、この形式でいくと本来保護されるべき弱い立場にある者がとり残されてしまう傾向がある。JVCのプログラムは、そういう人々に、汎用エンジンの構造や維持方法、また基礎電気理論や溶接などの技術を身につける機会を提供し、彼らの自立を助けるものである。同時に、とにかく自分を見失いがちなキャンプ生活の中で、多くの若者達を難解なことに挑戦させることにより彼らの自尊心をとりもどさせる役目も果たしている。

自主的本国帰還への道

カオイダン・キャンプは、UNHCR(国連難民高

等弁務官事務所)の管轄下にある。したがって、このキャンプにいるものは不法入居者を除いて全員難民と認められ、安住の地をみつけれられるまで保護されることを前提としている。これが国境沿いの避難民たちと大きく違う点である。カオイダンの場合、タイ政府の方針により、彼らの自主的本国帰還と同化定着が不可能であったことから、安住の地を求める方法は必然的に第三国定住となっていた。しかし、現在残っている難民のほぼ90%がすでにインタビューをすませ、第三国から定住を拒否された人々であることなどから、NSC(タイ国家安全評議会)は、クメール難民の第三国定住の可能性の限界を強調し、今後パナニコム・キャンプ(定住許可のおりた人々の調整キャンプ)に移動が予定されている4000人を除いた、約1万2000人をサイト2の南、国境から3キロのバン・タットに移動させる計画を発表した。

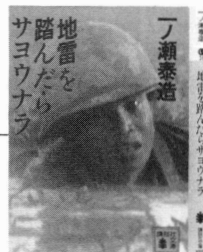
このカオイダン・キャンプ閉鎖の裏には、CGDK(カンブチア三派連合政府)を支持するタイ政府の政治的配慮がうかがえる。カオイダンというUNHCRに難民として保護されているキャンプがあるために、サイトB(シハヌーク派キャンプ)やサイト2(ソン・サン派キャンプ)などから第三国定住を望む者や、徴兵から逃れたい者達がひそかに流れてくる。いわゆるイリーガル(不法滞留者)である。この事は、それぞれの派閥にいる人々の忠誠心の弱さを如実に表しており、タイ政府にとってはCGDK支持の正統性をゆるがせる要因になりかねないからである。

このタイの配慮に対して、国連は、彼ら(カオイダンにいる難民)の政治的中立の維持と、再び戦禍にまきこまれるかもしれないという懸念から、反対し続けてきた。しかし、7月21日付けの新聞発表によると、国連はこの計画を認め、8月31日をもって定住インタビューを停止、9月、カオイダン閉鎖と出ているが、難民の段階的移動を考えると、もう少し時間がかかるとみていいだろう。

ここで注目されるのが移動した難民が、バン・タットにおいてどのような扱いをうけるかである。NSCの書記官によると、彼らは引き続きUNHCRに保護され、カオイダン同様、各種の教育施設や職業訓練所を設け、自主的本国帰還に向けてのトレーニング

センターに身を置くことになる。なお、人道的配慮に基づき、定住インタビューも個別に行う場合があると述べている。ところで、難民移動後のカオイダン・キャンプについても、同様に医療機関と職業訓練施設を残し、国境沿いのキャンプにいる避難民のための自主的本国帰還のための促進センターにするなどと述べているが、対象者をどのキャンプから

どのように連れてくるか、また、期間的なことなど不明な点が多く信憑性がうすい。いずれにしても、UNHCRの管轄下で政治的中立が保証されるならば、我々も、彼らの自主的本国帰還に際して、積極的に協力し、カンブチアの復興に貢献できる若者を育てあげていきたい。



一ノ瀬泰造を知っていますか

吉岡政江（旧姓熊本）

一ノ瀬泰造というカメラマンの名を耳にしたことがあるだろうか。1973年アンコール・ワットへ写真を撮りにいったまま消息不明となり、その後御両親によってその死が確認されたカメラマンである。

今からちょうど3年前、JVCボランティアの1人としてタイのカオイダン・キャンプにいた私はタン・キム・ホエーンさんという1人の難民から一ノ瀬泰造の名前を聞かされた。

「タイゾウ イチノセを知っていますか？日本人のカメラマンだった人です」その名前をおぼろ気に知っていた私はタンさんの話に耳を傾けた。

「私はタイゾウのことをよく覚えています。その人はアンコール・ワットで死にました」出身がシエムリアップだというタンさんは、どうやらずいぶん身近に知っていた様なのである。

「どういう事なの？ 詳しく話して下さい」

話はこういうことだった。一ノ瀬氏は日本のカメラマンであり、アンコールワットを撮ろうとタンさんの故郷であるシエムリアップにやって来た。その彼をアンコールワットに案内したり、家に泊めたり、また、カメラマンの助手などをしていたらしい。そして彼は一ノ瀬氏の最期の事も知っているようだった。

「いいえ、タイゾウが殺されたところを見たわけではないのです。タイゾウがアンコールワットに入り、少ししてそのニュースが伝わってきたのです。私のほかにも彼と親しくしていた友達は何人かいます。その人たちの方がよく知っていると思います」

一ノ瀬泰造の名を私が知っていたのは、『地雷を踏んだらサヨウナラ』という本を通してだった。手元にこの本がなかったので日本から送ってもらい、読んでみた。これはまさしくカメラ1つを携えて戦場を歩き歩く男の従軍記である。戦場での出来事をこと細かに記した日記や生々しい写真。読む過程でゾクゾクさせられるような場面がほとんど占めていた。その合間、合間には友人や両親との手紙のやりとりが読む側の心を落ちつかせてくれる。特に母とのやりとりの中には、お互いの信頼感の厚さがうかがえる文章ばかり並んでいた。

本の内容をタンさんに説明すると、「タイゾウのお母さんに手紙を書きたい」旨伝えてきた。はじめ息子が殺されたカンボジア人に手紙をもらおうということがどのような結果になるのか予想もできず、ためらっていたのだが、タンさんの想いは強かった。

さっそくタンさんは英語で手紙を用意してきた。その

手紙を一ノ瀬氏の両親の元に送った。しばらくして、同じカメラマンの野中氏を通じて一ノ瀬氏のお母さんよりタンさんと私あてに手紙が届いた。それは私にとってまるで驚くような内容だった。息子を殺したカンボジア人、憎いはずのカンボジア人をそのまま愛している、カンボジアの国までも。ここに私にあてられた手紙の全文を紹介しようと思う。

「お手紙有難く拝見いたしました。

熊本さんはもう3年近くもカオイダンでカンボジア難民のためにつくっていらっしゃる御様子、深く感動いたしました。

『日本の女性、大きくなったなぁー』としみじみ思います。

それにしても戦争はすでに終わったかに見えて、その傷痕は何年経っても少しも癒えてはいないのですね。汚れを知らない美しい瞳をした難民の方たちの悲しみの声が聞こえてくるようです。

息子が愛したカンボジアの美しい山や河、正直でおおらかな人々は母の私にとってもそのまま懐かしい人々であり、山河なのです。難民の方々が一日も早くその素晴らしい祖国に帰り、家族肩寄せ合って平和な日々を送ることが出来ますよう心から願っていますのに……。何の咎もないこの人たちにどうしてこんな小さな幸せすら与えられないのか、残念でなりません。

でもタンさん御家族がオーストラリアに亡命なさることも、また1つの幸せに向かっての旅立ちなのかもしれませんね。もはや小さな穀に閉じこもっている時代ではなく、世界は1つなのですもの。心の持ちようで新天地にも幸せを築くことが出来ましょう。（私は、やり切れない時はこんな自問自答をして自分を慰めています）

タンさんの手紙は知人に頼んで訳してもらいました。息子のこと、よく覚えていて下さって有難いと思いました。あの戦乱の中をよく生き抜いてこられた御苦労は口では言い表せないほどだと察せられます。

こうした方々を温かく見守り、希望を与え、再起への手助けをなさっている日本のボランティアの皆様にも心から御礼を申し上げたい気持ちで一杯です。今後もお身体には気をつけて良いお仕事をなさって下さい。

本当に有難うございました。

かしこ

熊本政江様

一ノ瀬信子 』

インドシナ難民問題の現在

武田 恵 治 (タイ在住 JVC会員)

難民救援へ

1980年、私はインド、ニューデリーの日本大使館広報室でインドシナ難民の悲惨な状況を新聞で読み東南アジアの異常な現実を知るに至った。

東南アジアはそれまで一度も訪問したことがなく、インドにも東南アジアを飛び越え、直接ボンベイの友人宅に居候していたからである。しばらくして、インド瞑想三昧の生活を切り上げ、これによって蓄えた精神的エネルギーを、ニューデリー以来頭の中に残っていた難民問題に向けようと考えていた。

インドの苛酷な自然とその大地から生れる人間の強い個性、初めて訪れるタイは、そんなインドの強烈な印象を背負っている私にとっては、天国以外の何ものでもなかった。しかし、そんなタイにも難民問題という大きな負担があるのは奇妙であり、そして、これら難民を援助するために世界中からボランティアが集まっているのも、富める国のジレンマのような気がした。そしてタイは、これだけ多くのボランティアを受け入れることのできる基本的な基盤があることでもやはり豊かだった。

1981年当時、難民問題は安定期に入っていた。援助の内容も緊急な状態は過ぎ、難民の自立、本国帰還に焦点が当てられていた。難民は第三国定住を待ち、彼らの経験した苛酷な状況の代償としてはあまりにささやかな援助が、日々の生活を支えていた。そして、多くのボランティアたち、彼らもまた援助を続ける一方で、難民と同じくらい個々の安定 (Settlement) を望んでいるように見受けられた。

タイの難民政策

現在タイには、12万人の難民と、30万人の避難民がタイ政府からの一時庇護を与えられている。難民に限っていえば、その数はピーク時の3分の1程度に減少し、タイ政府の方針である同国内からの難民の減少、第三国定住促進という意味では、着実に成果が出てきているといえる。取りも直さず、これを支えているのは、第三国による難民の受け入れ努力の結果であり、第三国定住以外では特に際立った成果の見られる政策はない。

しかし、タイ政府にとって重要なことは、難民問題一般にかかわる諸事情ではなく、何とかして自国が抱えている問題を解決することであり、そのためには、人道主義だけで問題は解決しないという基本的な考え方を持っている。そしてこの政策が結果的に難民に波及し、1月末のベトナムのボートピープルの追い返しであり、また、昨年問題となったモン族の強制送還である。この政策を裏付けるものとして、タイ政府はすでに1981年当時より主張しているように、インドシナ難民はすでに難民ではないというものがある。

私はタイ政府の主張を肯定するわけではないが、ベトナム統一後13年が経過した今日、やはり人道主義だけで問題が解決しない現実を見る必要がある。

日本をはじめとする援助国は、これら難民に対し今後10年でも20年でも援助を与え、難民キャンプを老人ホーム化できるだろう。しかし本当の人道主義とは時期を見極めて、難民に彼ら自身を動かす活力を与えることである。

たとえばカオイダン・キャンプに収容され、6～7年経った難民は、そのような外からの圧力が加わらない限り、自分で何かを決定する可能性を消失している。元来のどかな、そして豊かな大地でのんびりと過ごしてきた彼らにとって、誠実さが唯一のものであり、日本社会のような競争に勝抜き何かを達成するという、現状打開の意識を求めることはできない。彼らの幸福を考えた場合、本国帰還こそ唯一の可能性である。

1981～83年当時はボランティアが多く、JVCだけでも20～30人が活動していたが、難民キャンプの統廃合及び活動内容の変化によって、ボランティアの本国帰還も進んでいる。難民問題が解決すれば、タイにおける難民救援団体も必然的に消滅するだろう。

1980年当時から始まった日本人ボランティア団体の活動は、現在でも続けられているが、これまで、短い人で数週間、長い人で5～6年とボランティアを経験し、それぞれの期間に応じて貴重な体験を積んでいる。

私は1981年から83年までタイで活動し、「ボラン

ティアとは何か」と、盛んに議論した初期のボランティアである。ボランティアが直面するこの問題は自らの難民性と比較して、自分の価値観、あるいはボランティア終了後の生き方を違った次元に発展させるには、ちょうどいい機会だと考えている。この意味でも難民問題は、かわりを持った者にとって新たな疑問を投げかけていると思う。

ボートピープル帰還へのアプローチ

それはさておき、最近の難民の動静はやっと二段階に入った感がしている。ベトナムは英国に対し、7月初め東南アジアが直面しているボートピープルの流入増、特に香港の状況等を考慮したと考えられる自国民の帰還受け入れに関し、話し合いの用意があるとのメッセージを送った。これまで流出難民を庇護するASEANとそれを受け入れる第三国は、押しよせる難民を迎えるしか手立てがなかった。現実を考えると、英国が受けたメッセージは、流出当事国のアプローチという意味で大きな前進といえる。

今回ベトナムが英国に対して送ったメッセージの背景には、2年ほど前からベトナム及びカンボジア国内のギャング団（スマッグラ）が組織的に難民を送り出している状況が、明確となったということがある。国際社会が暗黙の同意を示したことにより、ベトナム政府の具体的なアプローチが開始され、現在交渉は2国間ベースで行われつつあるが、7月のASEAN外相会議では、最終的な国際会議の提案もされている。難民の流出当事国、庇護国そして受け入れ国の話し合いの輪が13年目にしつと完成し、その成果が期待される。

タイに到着するボートピープルは1987年には1万2000人に達し、これは1986年の180%増に当たる。タイ政府が国家の安全保障にかかわる問題と発表したのは、この数字でも明らかである。“追い返し政策”後は、急激に流入が減少し、すべてのボートピープルは不法入国者として扱われサイト2の南に収容され、その数はすでに3200人以上となっている。タイへの到着を避けたボートピープルについては、集中的に香港に到着している。7月だけで5300人が到着したといわれ、香港政庁は数回目のキャンプ増設を余儀なくされている。

香港の場合、一般市民が難民問題に多大な関心を示し、市民の税金によって難民が生活しているという意識が強い。その土地の狭さと合せ、物質的にも流入し続ける難民に対処できない現実が発生してい

る。最近のアンケート調査によれば、香港市民の70%以上が難民の追放に合意していることが伝えられている。

難民認定作業計画の発動によって、自国から危険を犯して脱出するボートピープルの90%は今や難民と認められない現実が待っており、加えて国際社会の憐れみ疲れから、彼らは本国に帰還する以外どんな可能性も残されていない。そして難民キャンプも移民センターから刑務所に変わりつつある。今後はベトナム国内に脱出の無意味な現状を知らせるとともに、同国政府は自国民の脱出を強く阻止しなければならない。

本年に入りベトナムの高官がタイを訪問してから難民の現状を理解し、自国民の脱出を助けるギャングや役人に対し厳しく罰を与えると約束した。しかしこれがどの程度成功しているかはさだかでなく、また、多くのボートピープルには第三国に親族がいるので、脱出用ワイロを調達することはそれほど難しい問題ではない。ベトナム政府も海外からの送金は歓迎し、その交換率も改善したと報道されている。これら親族からの送金が全貿易額の30%に達するという情報があるほど、ベトナム政府が海外の同胞から受ける利益は大きい。

難民問題を解決するためには、このようなベトナム政府の体質を改善することも必要である一方で、難民問題の根本的原因是インドシナ戦争にあることを忘れてはならない。1978年のベトナム軍のカンボジア侵攻、—これは現在も継続しているが、ベトナム政府発表どおり1990年にすべて撤退するとしても、その後は問題が山積みされている。

ベトナム軍の年内5万人撤退にしても、撤退ではなく後退であるとの情報が取り沙汰されているのが現実であり、このような状況下では真のカンボジアの平和は望めない。ベトナムが自国の経済の再建のために本腰を入れない限り、ASEANに庇護を受けている自国民の大量帰還受け入れは不可能に近い。

ベトナムのボートピープルは現状打開に対する強いスピリットを持ち、そして彼らは国際法には興味がない。豊かな生活を求めていることについては全人類共通している。したがってボートピープルの心情にたてば、国家とか国境は彼らにとって鉄格子でしかなく、そうであるとすれば、新しい国家のあり方を全世界は考えなければならない時に来ているように思う。

もらうお金に貴賤なし

三芳 田 鳩

わが国日本は、アメリカ合衆国を抜いて、今年中に「世界一の援助大国」となる可能性がある。先のトロント・サミットの直前には、ODA(政府開発援助)の5カ年倍增計画(5年間の合計で500億ドル以上)を閣議決定した。経済大国日本は、「世界に貢献する日本」をスローガンに、援助大国の道を疾走している。

しかしその一方で、民間団体(NGO)による海外援助や協力は、その金額において余りにも貧弱である。この桁違いのギャップを私たちはどう理解し、どう変革していけば良いのだろうか。

私は、JVC スタッフという立場を離れ、海外援助や協力にかかわる一個人として、NGOの資金難の原因とその解決に関して、私見を述べたい。

なぜ日本のNGOには資金が集まらないか？

その主因は2つある。日本社会の側とNGO側の双方に。まず前者、つまり日本社会の側の原因を探ってみよう。

他の先進国や途上国と比較して、日本はまれにある「価値体系が単純」で「排他的」な社会である。現代の日本では、株式会社・日本に象徴される職場集団が社会の中心にあり、「儲けることは良いことだ」という資本主義の部分概念が、日本社会の中心的な価値観になってしまった。かつて日本のどこにでもあった村落共同体が戦後急速に崩壊し、職場共同体がそれにとって代わった。職場は給与を支払うだけでなく、福利厚生、教育、健康管理、住宅、慰安旅行、運動会、忘年会に新年会、慶弔金の支給、預金に貸し付け、恋愛に結婚、果ては家族問題の仲裁にも職場組織は尽力する。日本社会の価値体系を単純化させ排他的な国民性を蔓延させた原因は、村落共同体の崩壊ばかりではない。宗教の形式化、教育の画一化なども見逃せない原因である。

このような社会では、職場の仲間と飲みに行き一夜で何千万のお金を使うことはあっても、その一部でもNGOに寄付しようと思う人はなかなか育た

ない。

次にNGO側の主因を挙げたい。一口に言って、NGOの潔癖主義がそれである。これは「清く貧しいボランティア」という社会通念と表裏一体の関係になっている。NGOで活動する者は「個人の寄付はきれいだ。S財団のカネは汚い」などとよく言う。また、「資金をどこから貰うかが組織の性格を規定するので、資金源を選別すべきだ」とも。皆さん、本当にそうでしょうか？

もらうお金に貴賤なし

お金は、所詮お金でしかない。目的ではなく、手段としての仲介物でしかない。私たち NGO は、活動の遂行上やむをえず必要になり調達するのであって、金融業者のように「お金第一主義」を堅持しているわけではない。したがって、お金をどこから調達するかで組織の性格が根本的に規定されることはない。もちろん極左や暴力団などのように、相手の意志に反して略奪する方法は否定するが、納得づくで頂くお金に、頂く時点で貴賤はない。活動の対象者に対してうまく活用されれば、そのお金は貴いものとなり、無駄遣いされれば、賤しいものとなる。つまり「どこからお金を貰うか」ということよりも、「どのように使うか」が、お金を頂いて活動する者にとっては重要なのである。自分たちの活動に自信があり、頂いたお金を活かし切れる力量があるなら、相手の納得づくでどんなお金でも頂いて構わない。

繰り返すか、「私たちの活動にお金を出してくれる人や組織がそのお金をどのように獲得したかは原則的に問わない」と私は言っている。しかし上述したように、日本の多くのNGOはそれを問うている。そのような人々が共通に言うのは、「市民からのお金はきれいだが、途上国の民衆を搾取して成り立っている企業やギャンブルの上がりりで運営している財団のお金は汚い」というものだ。そう言う方に聞きたい、「どんな方法でその市民がそのお金を得たか、あなたは調べましたか」と。敢えて言えば、「市民

からのお金がきれいだ」と主張している人は、その寄付者の善意に甘えているのではないだろうか。こうも問いたい、「一市民が高校野球の勝敗にお金を賭て儲けた1万円を寄付すると申し出た場合、また金融機関が国際的なマネー・ゲームで上げた収益金の中から1000万円を寄託すると申し出た場合、どう対処しますか」と。

それでもなお、お金の貴賤を問いたいというのはあれば、「汚いお金」でもうまく活用し「きれいなお金」にする力量としたたかさを私たちは持ちたいものである。

4つの留意点

しかし実際、お金は魔力を持っている。いともたやすく個人の意志や行動などを歪曲しえる力があることを決して忘れてはならない。

そこで、どこからお金をもらうにしても、少なくとも以下の4点に細心の注意を払うべきであろう。

① 活動に悪影響があるような使途の指定

一例を挙げれば、「人件費には寄付できません。物資購入なら出しましょう」というのがある。これは、お金をもらって日々活動を行う者にとっては、多くの場合、好ましくない指定である。資金と物資を大量に投入するODAと違い、私たちNGOは人材が命である。良き人材なしに良き活動はありえない。したがって、一定期間以上活動する人材、とりわけ海外で活動する者には、ある程度の生活費を支出しなければならない。もちろん、必要以上の人材にお金を出すことはないが、特に教育的な要素が強い活動においては、全体に占める人件費の割合が比較的高くなる。これは、活動の性格上当然とも言える。

余談になるが、余り必要でない物資をも購入し人件費の割合を低減すれば、世間受けする。しかし実際は、お金の無駄遣いであり、現場の活動にとっては「百害あって一利なし」である。

② 特定の資金源への過剰依存

特定の団体にのみ資金を過剰に依存すると、その団体の財務状況や方針などの影響を大きく受ける。最悪の場合、その団体からの資金が途切れたとき、その資金を受けて実施してきた活動を即刻終了しなければならないこともありえる。また、もしその団体から無理難題な要求があった場合、苦しい選択を迫られる。断れば資金が減るか出なくなるかも知れない。かと言って要求を飲めば、活動に悪影響が出たり他の団体や個人からの資金が減ることもあり

える。

また、違う例もある。難民関係の活動のみ行っていると、その分野に対するお金はそこそこ集まる。しかし、開発協力など他の分野の活動を行おうとしても、資金がなかなか集まらなくなる。

③ 資金の安定に伴う力量の低下

お金が安定的に入るとなると、つい甘くなる。とりわけ、資金調達の大変さを実感し難い「活動の現場」で金遣いが荒くなり、活動のフィード・バックも型通りにになりがちである。極端な場合、何を実現するために日々活動しているのか、その活動の基本さえ見失いかねない。適切な財務管理と活動の自己評価を内部的に行えない段階で資金が安定すると、その活動は大方失敗する。この弊害を最小限に食い止めるには、ひとり一人の自覚と努力、および活動を通して得た経験の組織的蓄積が不可欠である。

④ 好ましくないお金の増加を助長

私たちがお金をもらうことによって、お金を寄付してくれる個人や団体が社会的に好ましからざる活動を継続したり拡大したりすることは避けねばならない。私はいくつかの事例を見ているが、現在や近い将来において日本のNGOがこの問題に悩まされることはないと思うので、ここではこれ以上述べない。

人類の歴史を振り返ると、富の拡充と欲望の充足のために、人間は武力を行使してきたことに気付く。しかし近代、資本主義が世の中心に君臨するにいたり、お金によって何事をも実現し、いかなる問題も解決しようと人間は考えるようになった。かつて物によって裏打ちされていたお金が、今やお金がお金を自己増殖する時代になってしまった。あたかも金力が武力を超えようとしているかのようである。

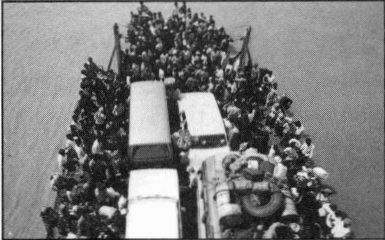
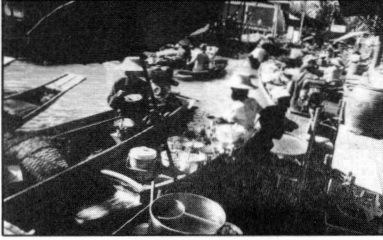
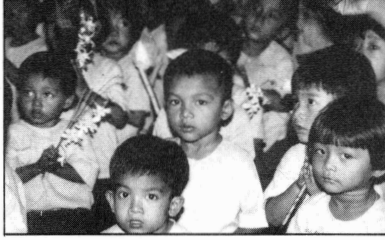
しかし、私が「どこからでも、誰からでも、ある条件を満たせば、NGOもどしどし資金をもらってかまわない」と力説するのは、このような「お金中心主義」を追認したからではない。活動の遂行上どうしてもお金がある程度必要であるにもかかわらず、日本社会は余りにも冷淡だからである。

最後に、個人的な事柄に触れるのをお許し願いたい。私は守銭奴でありたくないと願う、一民衆である。私の年収は、公務員である妻の年収の3分の2ほどである。そして、私の知るNGO関係者のほとんどが、私と同じ願いを持ち、同じような状況にあると思えてならない。

(皆様からの御意見、御感想をお待ちしています)

JVCチャリティーカレンダー 「アジアから!—朝霧^{もや}の中で」

〔カレンダーをお求めになる場合は直接JVCに電話か郵便でお申し込み下さい。1部1500円、20部以上1200円(送料別)〕

	1 月 静かな入江の夜明け。誰よりも早く漁場に向かう(ビルマ)。		7 月 人も物も満載したメコン川の渡し(カンブチア)。
	2 月 お坊さんの食事は正午までの2回だけ(タイーバンコク)。		8 月 運河で遊ぶスラムの子供たち(タイーバンコク)。
	3 月 イラワジ川の水汲み。小さい子供たちも上手に牛を扱う(ビルマーバガン)。		9 月 タマネギとニンニクを売る娘さん(ビルマーラングーン)。
	4 月 たくさんの子供たちが見習い僧となって修業する(ビルマ)。		10 月 自分たちで作ったコマで遊ぶモン族の子供(タイーチェンマイ)。
	5 月 ビルマの七不思議——押しても落ちない岩。		11 月 朝もやをついて走るサムロ(ビルマーラングーン郊外)。
	6 月 水上マーケットで買いものは何でもそろってしまう(タイーバンコク郊外)		12 月 先生に感謝する日。子供たちは歌を歌い、先生に花を捧げる(タイーバンコク)。

JVCがすすめる 100冊の本 (3)

価値体系 (ものの見方)	生きるとのこと 生物から見た世界 森林の思考・砂漠の思考 いのちと農の論理 パパラギ いま、民衆の科学技術を問う 「豊かさ」とは何か 状況への散歩 人類の目標	エーリッヒ・フロム ユキスキュル 鈴木秀夫 玉野井芳朗 他編 E・ショイルマン フォーラム 人類の希望編 飯田経夫 小田実 アーヴィン・ラズロー他	紀伊国屋書店 思索社 NHKブックス 学陽書房 立風書房 新評論 講談社現代新書 日本評論社 ダイヤモンド社
アジアの文学	人間の大地 いばらの道 敵の奥深く 娼婦サリナ 農村開発顧末記 田舎の教師 東北タイの子 マニラ——光る爪 メコンに死す さよなら・再見	プラムディヤ・アナンダ・トゥール ジャーノン・アフマット カインバン サマッド・サイド ニミット・プーミターウォン カムマーン・コンカイ カムブーン・ブンタヴィー エドガルド・M・レイエス ピリヤ・パナースワン 黄春明	めこん社 井村文化事業社 新日本出版社 井村文化事業社 井村文化事業社 井村文化事業社 井村文化事業社 めこん社 めこん社 めこん社
子供たちに	サムルーン 世界はいま2 飢えに苦しむアフリカ 世界はいま8 南アフリカのアパルトヘイト 地球に生きる ギタはインドの女の子 どこにいるかわかる？ カンパンのガキ大将 地球の未来はショッキング 1945年8月6日ーヒロシマは語りつづける 戦場で死んだ兄をたずねて ひゃくばんめのサル	児童財団・児童権利擁護センター 轡田隆史 轡田隆史 岩崎駿介 バーバラ&エバーハルト・フィッシャー ユネスコ・アジア文化センター ラット 高榎堯 伊藤壮 長部日出雄 ケン・キース・ジュニア	明石書店 佑学社 佑学社 岩崎書店 アジア・アフリカともだち文庫 こぐま社 晶文社 岩波ジュニア新書 岩波ジュニア新書 岩波ジュニア新書 カタツムリ社



南部良一さん



●「チャリティー・ダイエット」って知っていますか？

JVCのオフィスの一角に、海外のボランティアからの手紙、他のNGOの研究会の案内……、いろんな紙が雑然とはってあるスペースがあります。

とうとう一夏中おかしな天候だった今年の夏、そのコーナーにちょっと変わった紙がはってありました。題して『チャリティー・ダイエット』。なんだろうとよく読んでみると、「頑張ってる、その代わり、1kgにつき何円かを決めて、痩せた分だけJVCにカンパしてほしい。もしそこまで痩せなかったら、その分、カンパを約束してくれた人の数に応じて自分がカンパする」というもの。10人以上のスポンサーの名前もありました。思わず笑いだすような、ユニークなことを考えだしたのが、今回、登場する南部良一くん。東京農業大学の3年生です。

痩せましたか、というのが私の第一声。

「はい。86.5kgだったのが、72kgになりました」と南部くん。スゴイ。どんな方法かしら？
「ただ、晩飯を抜いているだけです」

なんと、彼は夕食を食べないで、稲刈に精を出しているというのです。それじゃあ、痩せるはず。遅くなりましたが、このインタビューは東金のJVC農場にいる南部クンに、電話したものです。

「大学に入った1年の夏休みに、ソマリアに行きました。そんなに深い意味はなかったのですが、ただ外国に行ってみたい、という気持ちがあって、ちょうど大学で講演会があったので……」

そのソマリアの印象が強烈だったのです。

「何がといわれても困りますが、とても面白かった

ボランティア登場6

のです。たとえば……、えーと、基本的には違うなとは思いますが、考え方が全然違うし……、難民に関しては予想していたから何にも驚かなかったけど、360度の地平線とか、飛行機から見た緑が全然ない地上の景色とか……、そんなのにも圧倒されました」

と話す南部クン。ソマリアから帰ってきてからはJAST（東京農大生で作った団体）の一員として東金のJVC農場で活動したり、東京グリーンウォークで頑張ったりしました。

●どうして最近の若い人は……

最近「学生の保守化」ということが言われます。自分勝手に、覇気というか、希望というか……元気がないのが多いという評判です（オジさんは、はがゆい）。そのせいか、一時は10人を超したJASTも、初期のメンバーが卒業したりして、彼一人になり消滅しました。仲間づくりや、後継者づくりは、と聞いてみました。

「JVCだけでなく、いくつかの団体に連れて行くんだけど、長続きしないんだよね。飽きちゃうというか、3～4回行って、それで終わりにしちゃう。ぼく自身としては、JVCにくるのは、ただ面白いからで……、いわばバイクに乗るとか、ウインドサーフィンをするとかと同じノリのところもあるんだけど。

実際、JVCにくると面白いよ、変わった人ばかりだし……。岩崎さん（言わずと知れた代表のこと）にしても、高橋さん（サヘル会の代表、東京農大の先輩）にしても。本音の部分も多いしね。

来なくなるひとというのは、そんな部分に触れられなかったり、責任ある仕事を任されて、やりがいを感じたりすることができないからじゃないのかなあ。JVCにしても、他の会にしても、イベントが少ないから……」

そういえば、こんな話はこの欄の2回めで、正木さんも話していました。彼の場合は、最初やるのがなかったので足が遠退いたけれど、次の機会には学習会の世話役を押し付けられて、定期的に顔を出すようになったとか言っていました。

若い人が減るのは本当に困ります。なんといっても、暇と情熱があるのは彼らですし、未来を築くのも彼らなんですから。どうぞ来てください。スタッフがお相手しないときには、我ら中年組が相談に乗ります。そう、前々回の石森氏とAGとで。

JVCプロジェクト

1988年 8月25日 現在

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
東京本部	渉外，事業計画，資金調達，ボランティア調整，会計，総務，情報収集および広報等。 機関誌『トリアル・アンド・エラー』発行。 JVC説明会—毎月第1月曜日 午後6時～9時 毎月第2,3土曜日 午後2時～4時 学習会 月1回 午後6時～9時 (希望者にはハガキにて連絡)	全国社会福祉協議会	岩崎駿介(代表) 星野昌子(事務局長) 加藤志保，林 達雄 前川昌代，鍋田三芳， 古西 勇，富安光子， 岩崎美佐子， アイネス・バスカビル
神奈川県 (JVC神奈川)	神奈川県内における渉外，事業計画，情報収集，資金調達等を行う。 神奈川県および県内の市民団体との共同事業の企画，運営。定住難民プロジェクトのコーディネーション。 神奈川県内を中心とした「エチオピアキャンペーン」の一環として企画した「エチオピア・スタディーツアー」に一般から12人の応募があり，書類選考の結果6人の人が8月20日から11日間のツアーに参加した。		山口誠史
日本国内	●定住難民プロジェクト ラオス人の主婦，パタナ・ボン・ビルマさんの協力により，ラオス語による電話相談サービスを開始した。電話番号は0467(79)2258	ジャパン・タイムス 神奈川県福祉部 禅林寺龍華会基金，「チャリティ・ウォークかながわ」，日本少林寺拳法連盟	山口誠史，落合正幸， 谷本栄子，他約60人
	●東金農場 自給用の野菜を作っている。 東金で産直運動をしている“さかさま農園”や山武ボランティア協会などと，毎月1回勉強会を行っている。		松岡美奈子 東金市民有志
エチオピア (ウォロ州)	●緊急食料援助(コレブを中心に) 88年の大雨期には例年以上の降雨が見られ，干ばつは終わりをつげた。しかし，作物が順調に育ったとしても5カ月後の収穫期までは食糧配給が必要であった。降雨のため食糧の輸送がとどこおりがちである。 ●総合的復興促進(マーシャ) 1. 植林，土壤保全 7月中に山間部の土壤保全用の植林を終え，その後，村人たちに苗木を配り各家庭に植えてもらっている。 2. 母子保健・栄養 家庭菜園，離乳食等の訪問形式による指導が母親自身の手で行われつつある。 3. 給水 清潔な飲料水確保のため，泉の保護をしている。 種子銀行，農業教室も引き続き行っている。	CRDA，犬養道子・みどり一本運動，日本少林寺拳法連盟，モラロジーMIRC，東京グリーン・ウォーク，西本願寺，ジャパン・タイムス，チャリティ・サイクル，Tree for lifeの会	鈴木直喜，山田 盛， 伊藤達男，伊藤幸子， 有本敦子，イエットベルク， ソロモン，パレタ，ダニエル

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
ソマリア マガネイ・キャンプ (ゲドー郡) ハルバ・キャンプ (ゲドー郡)	人口6000万のソマリアも、世界的な経済システムに組み込まれれば組み込まれるほど、貧しくなっていく。工業製品はもとより、食糧の1部までも外国からの輸入や援助に依存しているためだ。ちなみにソマリア通貨(シリング)と米ドルの換算レートが今年だけでも2回も激変した。(米ドル=99シリングから178シリング、そして213シリングへ)この国自体の自立が年々歳々消失しつつある。 ●農業による自立促進 Unit12の建設が終了し、作付けが始められた。5月に起きたジュバ川の氾濫で1部の用水路が壊されたが、農民たちの努力とJVCの協力で完全に修復された。 ●植林 ハルバ・キャンプで再度苗木を配布するため、育苗を続けている。 ●現金収入 水屋、かじ屋、パン屋、靴屋、焼物屋を継続中。 ●コミュニティー・サービス 地域医療のトレーニングを継続している。	UNHCR, 創価学会青年平和会議, 仏国土をつくろう会	金子一弘, モハメッド・アブディ, シアッド, 荻ノ迫善六, 中野周二, モハメッド, ラシッド, アオキ, アブディ・ジョフ, ムハボ, アブドラヒ, アブディナサル 大西 薫
ジャララクシ・キャンプ (ヒラン郡)	あい変わらず農民たちは40haの農場建設に精を出している。主水路はほぼ完成し、副水路の建設にとりかかった。	R.I.-Japan	シュクリ
カンブチア (プノンペン) (カンダール県)	●サンタビエップ技術学校/ワークショップ 建物の敷地内では、工場用水のための井戸掘りと給水設備の設置、及び門から工場までの地面の舗装をしている。現在、工場長以外に26人のカンブチア人スタッフがいて、そのうち訓練生は19人。9月からは彼らを含め50人の訓練生が6カ月間の研修を受ける。目標は、エンジン及び自動車に関する基礎知識と実務技能の習得である。保健、教育、農業、社会福祉の各省からも2,3名ずつの訓練生を受け入れる予定である。 ●井戸掘り 農業省水利局の井戸掘りチームは8月から9月にかけてプノンペン市内で3本の井戸を掘り、12月以降の乾期にカンボット県の農村での飲み水を確保するため17本の井戸を掘る予定である。 ●RINE(ライン)プログラム〔母子保健活動〕 7月5日から、遠距離のため今のライセンスセンターを利用できない村々への巡回活動を開始した。おかゆと豆乳の作り方を教え、紙芝居による栄養と環境衛生指導を行った。同時に乳幼児検診を行い、ビタミン剤などを与えた。 8月3日、自動車労連寄贈のニッサン・ピックアップトラックが到着した。その後約1週間の間に、肺炎の赤ちゃんや出産後出血の多かった母親等3人をプノンペン市内の病院に運んだ。ライセンスセンターの建物はまもなく落成する。	創価学会青年平和会議, モラロジ- MIRC, 立正佼成会, 自動車労連, 西本願寺, 善興寺ダーナ基金, 高岡寺族青年会, 覚法寺, 「チャリティ・ウォークかながわ」, 日本少林寺拳法連盟, 毎日新聞大阪社会事業団, 大竹財団, 東京都社会福祉協議会, 国際ソロプチミスト千代田, 明るい社会づくり運動神奈川県協議会, 浄土宗東京地区青年会, 和平基金, 国際保健協力市民の会(SHARE) 仏教救援センター	熊岡路矢, 簗田健一, 簗田玲子, 馬 清, 釘村千夜子 〔カウンター・パート〕 タック・カン, アム・デイエン, メアス・サメット, ゲット・ソーン(保健省) アン・サルン医師(カンダール県保健局) ニム・ニエム医師

活 動 地 名	活 動 内 容	出 資 団 体	担 当 者
タイ バンコク事務所	①総務、会計、資金調達 ②各機関（国連、タイ政府、日本大使館、各国民間援助団体）及び東京事務所、各プロジェクトとの連絡調査 ③情報収集、広報活動 ④日本人主婦ボランティアとの連絡調整 ⑤季刊「ニューズレター」（英語、タイ語）の発行 8月16～27日、JVC・モラロジー国際救援運動推進委員会合同のタイ・スタディツアー（9名参加）が各プロジェクトを見学した。	全国社会福祉協議会	ボンピモン・チャイブーン、カモン・ミンムアン、スンニー・テイチャリヤクン 熊沢ゆり
カオイダン （カンブチア 難民キャンプ）	●西崎憲司記念技術学校 現在467名の若者が一気筒、単車、自動車のエンジン構造や電気、溶接などの技術習得に励んでいる。 8月20日から24日にかけて不法滞留者に対し、「Site 2、Site Bまたはカプチューン・キャンプのいずれかに移動を希望する者はDPPU（Displaced Persons Protection Unit）に出頭し、名前を登記せよ」との指示があった。これには約2000人の人々が出頭した。カオイダン移動の第一歩と思われる。	UNHCR、SV（Stichting vluchteling）	ソムヨット・ラタナタム、清水俊弘、大石道子
バナニコム （第三国定住待ち キャンプ）	●日本語学校 - 日本定住予定者へのプロジェクト ①日本語教育 ②日本文化・習慣の紹介 ③渡航準備オリエンテーション - 他国定住予定者へのプログラム 渡航準備オリエンテーション	天理教千葉	フォード順子、鶴岡善和、山畑 匡、柿木光寿、アナン・ブダミリンパティープ
地域開発 （バンコク市内の スラム地区） （ブリラム県の M村）	●奨学金プロジェクト 学校訪問を行っている。 87年度の報告書の発送を終了した。 ●クロントイ図書館 Lock 6および70ライという地区で図書活動を行っている。 ●地域調査 スラム生活改善プロジェクトの実施地域としてラチャパタンスラムを選んだ。 ●農村開発 給食プログラムのための活動をM村の小学校で行っている。	モラロジーMIRC、JOFIC、We Love Asia Tree for life の会 雄勝町町内寺院会 国際ソロプチミスト駿河	パティイ・チャンスリヤオン、サムルアイ・ジョンヨークラン、リーラ・クンナロン、コメン・スンスマン 今泉 恵
ラオス （ヴィエンチャン）	●生活改善指導員養成センター 婦人を対象に母子保健、幼児教育、家政一般、農業訓練等の一般知識修得並びに実習を保健省、教育省などの協力を得て行うセンターの運営援助、および技術協力を予定。 センターの建設は7月15日に着工した。完成予定は1989年1月。 1988年11月にはセンターでの指導要項を作製するため、ヴィエンチャンに隣接する3県の農村で実情調査を行う。	庭野平和財団	谷山博史、前田初江

JVCの活動とその目的に御理解を

▶JVCとは—Japan International Volunteer Center
は1980年2月、タイのバンコクで設立された民間救援団体
です。1979年暮れの、インドシナ難民の大量流出をきっかけに、日本から駆けつけた若者と、現地タイですでに活動を始めていた日本人とが一体となり、現在の組織の原形ができました。JVCは、活動者の自発的な意志に基づき、日本の個人・団体からの寄付金、国連機関からの委託金等によって運営されています。JVCは、人種、国籍、習慣、宗教その他の信条の違いを越えて、難民および同様の窮境にある人々を対象にできる限り継続的な活動を行ないます。

▶JVCの会員募集について—会員は、総会に出席し、JVCの方針などを決定する他、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・上映会・学習会等へ参加することができます。また正会員には自動的に、機関誌(T/E)をお送りいたします。会員の種別と年会費は以下の通りです。

- ・正会員 (一般会員 10,000円 活動者会員 3,000円
団体会員 30,000円 学生会員 3,000円)
- ・賛助会員 金品による支援 (金額は自由です。)

▶機関誌『Trial & Error』のみの購読について

- ・毎号1冊送付 年間購読料 3,000円
- ・毎号4冊送付 年間購読料 10,000円

▶送金の方法—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

- ①会員：東京5-48365 加入者名—JVC 会員係
- ②T/E：東京3-54186 加入者名—JVC 東京事務所
(住所、氏名、購読開始月をお書き添下さい。)

▶みなさまの募金を支えるJVCの活動—救援活動をより充実させるため、以下の募金をお願いしています。なお募金の20%をJVCの運営経費に充当させていただいています。

- A. アフリカ難民救援募金 (8月小計 227,107円) アフリカの難民・飢餓民への救援プロジェクトに使われます。
- B. グリーン・フォー・アフリカ募金 (8月小計 155,643円) アフリカの土壌回復、農業、植林等に使われます。
- C. インドシナ難民救援募金 (8月小計 20,000円) タイ国内にある各難民キャンプのプロジェクト費にあてられます。
- D. カンプチア募金 (8月小計 675,000円) カンプチア国内の復興のために使われます。
- E. タイ・スラム募金 (8月小計 14,000円) バンコク市内のスラムにおける生活向上のためのプロジェクト及び図書活動に使われます。
- F. スラムの子供奨学金・基金 (8月小計 29,000円) バンコク市内のスラムの子供達が学校へ通う費用を援助します。
- G. タイ農村募金 (8月小計 0円) タイの農村開発のために使われます。
- H. 定住難民募金 (8月小計 0円) 定住難民のための日本語教材費と家庭教師の交通費に使われます。
- I. JVC運営経費募金 (8月小計 3,000円) 現場を支えるのに不可欠な事務運営経費、人件費に使われます。
- J. ラオス募金 (8月小計 92,000円) ラオスの婦人の生活向上プログラムのために使われます。
- K. 無指定募金 (8月小計 200,440円)

編集後記

▶サンケイ新聞の記者だった近藤紘一さんの著作に、『したたかな敗者たち』(文春文庫)というのがある。そのなかの1章、「ジャングルの抵抗者たち」には当時の国境の様子がまるでドラマでも見るように描かれている。のたうちながら死んでいく人々、クメール・ルージュの敗残兵、カンブチアをめぐるASEANや中国のかけひき、そして涙をのみながら三派連合の成立を受諾したソン・サン。国際社会は一番弱いカンブチアの人々にすべての矛盾を押しつけた。今さらながらに彼の確かな目と暖かなまなざしに驚かされる。もし生きておられたらお聞きしたいことがいっぱいあったのと思う。



▶送金の方法—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

- 東京9-27495 (募金種目名をご記入下さい。)
- 加入者名—JVC 東京事務所

犬養道子・「みどり一本」募金

東京0-212497 (8月小計 629,556円)
犬養道子さんの御厚意により、JVCに上記の口座を設けることになりました。この募金はエチオピアの植林プロジェクトに使われます。

昭和63年9月20日発行 (毎月20日発行)

編集人 前川 昌代
発行人 星野 昌子
発行所 日本国際ボランティアセンター(JVC)東京事務所
〒113 東京都文京区湯島3-1-4 会田ビル5階
☎03(834)2388 FAX:03(835)0519
Telex: 7604025 JVCHQ UC
神奈川事務所 〒231 横浜市中区山下町2 産業貿易センタービル9F (財)神奈川県国際交流協会内 ☎045(671)7082

印刷所 (株)ベスト・プリンティング

※本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。